

## 2. 3年ぶり対面開催となった国際銅研究会など

名井 肇 理事長報告

主催者：International Copper Study Group
開催日：2022年10月18日～19日
会場：THE ALTIS GRAND HOTEL, LISBON

10月17日の週、ポルトガルの首都リスボンで国際銅研究会、国際鉛亜鉛研究会、国際ニッケル研究会の三つの金属研究会の定例総会が開催されました。コロナの影響で対面での開催は3年ぶりとなり、会場では久々の再会を喜ぶ各国の参加者の姿が見られました。ただ、中国からの参加はなく、ロシアからの参加も少なく、銅研究会に関しては参加者ゼロでした。

19日には「グリーンエネルギーへの転換と非鉄金属」のテーマで三研究会合同のセミナーが開催され、私もプレゼンを行いました。私からは2050年カーボンニュートラルにむけての日本の取り組み状況を紹介しました。また昨年11月にメタ研が開催した「カーボンニュートラルセミナー」においてプレゼンターの一人名だった渡博士（国立環境研究所）の研究成果を紹介しました。

今後のグリーンエネルギーへの転換においては、リチウムイオンバッテリー向けや風力発電向けなどの各種非鉄金属需要の増大が見込まれるなか、米国、EUからはその供給源の多くが中国に依存していることの危機意識が強く表明されました。また、増大する利用に対し、十分な供給が可能なのかといった問題意識についても熱を帯びた議論が行われました。

私自身にとって2008年以来、14年ぶりの金属研究会への参加となりましたが、会議の方向性は14年前と大きく変わりました。一つは今回のセミナーのテーマでもあるカーボンニュートラルの問題です。14年前にもこの問題は意識されてはいましたが、当時の金属研究会の場では、まだ夏休みが始まったばかりの宿題といった位置づけでした。しかし今回は学校はすぐ始まるのに宿題やってない、といった雰囲気になっていました。

もう一つの大きな変化は中国の存在感の急激な拡大です。需給に関する統計も、中国とそれ以外の世界と分けた上での分析が必要となるなど、少なくとも量的規模における中国の姿は、過去どんな国も持ったことのないレベルになっており、一部の参加者からは今後の動向について神経質になっているとのコメントがありました。

三研究会のうち、国際銅研究会はメタ研が創設された1989年に設立された「同じ年生まれ」の組織です。金属需給や地球環境問題との関係が注目されるなか、お互いに切磋琢磨しながら貢献を続けていきたいと感じました